巨乳妖魔討伐伝
KYONYU YOUMA TOUBATSU DEN
PRESENTED BY
サーチライト
巨乳妖魔討伐伝
—斬魔の〈刀〉を鍛えるサキュ
そして握られる正義の剣士♡
KYONYU YOUMA TOUBATSU DEN
巨乳妖魔討伐伝Ⅱ
—斬魔の〈刀〉を鍛えるサキュバスたち—
そして握られる正義の剣士♡

これまでのあらすじ

〈妖魔〉と呼ばれる男の精を貪る化生と、それを討伐するための〈妖斬り〉が居る仮想現代。巨乳妖魔アイラとカザネが発動した〈妖斬隊・第十五地区討伐作戦〉は夜闇を犯し続けていた。

堕ちた地区長・来栖成哉により「逸材」と呼ばれた妖斬り・甲斐弘は罠にかけられる。仲間と分断され、アイラとの戦いに誘い出された弘は善戦するも敗北。成哉と同じく〈鍛錬〉――妖魔による快楽調教にかけられてしまう。

決意を胸に抗う弘だったが、魔性の美貌が磨いてきた〈閨〉の技に、隠してきた秘密を暴かれてしまう。

弘はかつて妖魔に犯された事があり、その快楽を忘れる事が出来ていなかったのだ。

心の隙をつかれた弘は〈鍛錬〉の快楽に屈服。魔悦を与えてくれるアイラの虜となり、巨乳妖魔専用の〈刀〉―射精奴隷―となる事を選んだ。

妖魔たちの次なる標的は妖斬り・卯月玲雄。十五地区のエースであり、カザネに兄を殺された過去を持つ青年剣士。カザネへの復讐のために妖斬りになった彼の前に、仇たる巨乳妖

魔は微笑みながら現れた――

序　裏切り

静まり返った地区本部、地区長室には机に向かう成哉の姿があった。

地区長ともなれば、多くの事務も率先して担う。本部とのやりとりや査察の受け入れ準備といった仕事も多い。責任は常に雑務を引き連れてくるのだ。

「……第六地区、か……」

パソコンの画面には、妖魔の動きが活発化しているレポートが挙げられている。各地区への注意を促していた。

本来ならば、俺もそれを受け、十五地区の対策を練らねばならない立場の人間だが――ちらり、と時計を見る。

今、この十五地区では妖魔と妖斬りが戦っている。

それは報告されず、よって増援もあり得ない戦い。

一人は地区最年少にして将来有望な妖斬り。もう一人はこの地区随一の妖斬り。

成哉は、彼らと一緒に多くの戦いに身を投じてきた。絶望の中に希望を見つけ、苦しみを突き破り花開く喜びを共にしてきたのだ。兄弟のような仲間。

これが物語ならば、必ずハッピーエンドを迎えるべき男たちだ。

彼らは今、妖魔と戦っている。

妖魔――男の精を搾り取る艶やかな化生。夜に潜む絶世の美貌。

妖斬りである以上それは宿命である。使命である。そして彼らはエースである。

だが、彼女たちは別格だ。

長きにわたり精を貪り、妖魔の中でも「冠位」なる最強の称号を持つ、艶やかな二体の巨乳妖魔。

艶めかしく、甘く、たわわで。それでいて残忍な笑みを浮かべる魔性――

宿敵であるはずの妖斬りですら、ひとたび彼女たちの〈鍛錬〉にかけられてしまえば、誇りも使命も決意も忘れさせられてしまう。

絶世の美貌の虜となり、妖斬りとして練り上げてきた精の上質さを、最低の形で誇るようになる。

何せここに、実例が居る――

「……」

勝って欲しいのだろうか。負けて欲しいのだろうか。どちらに？

今、隊士たちを結集すれば、戦いを止めさせる事が出来る。
自分には判断力も常識も、誇りも理性も残っている。妖斬り地区長としての己は、今すぐにそうすべきだと言っている。
強力な妖魔だ。絶対に倒すべきだし、倒されるべき妖魔だ。
その声が、脳内に響き渡っている。
（俺は、一体……）
それなのに、両手は動かない。ただため息をついて時計に目をやり、何分たったのか、それだけを見ている。
何をしているのだろう。俺は――
「――ダメよ？　地区長サマ。悩むために悩んでいても答えは出ないわ？」
「っ……！」
その声に、背筋が震えた。バクつく心臓を感じながら振り返る。
部屋の隅に、常人では気付かない小さな蜘蛛の巣が張ってあった。

巣はゆっくりと領地を広げていき、あっという間に部屋の半分を覆う。
「ど、どうして、今……」
妖魔の色香が満ちていく。地区長室にホットラインを作られた事に歯噛みしつつも、成哉は生唾を飲んだ。
「初めが肝心じゃない。地区長サマがおかしな事を考えていないか、見に来てあげたのよ？」
艶やかな赤い髪をなびかせ、肉厚の唇に指を這わせる妖魔が現れた。
鷹を思わせる、サディスティックな美貌だった。
作られたしなを、蠱惑的な肢体を、黒赤の和服が彩る。
零れそうな乳房やスリットからスラリと伸びた生足は、浮かぶように白く輝いている。
「……アイラ様っ……」
艶やかな巨乳妖魔。十五地区を襲撃した二匹の「冠位」の一。
そして――〈妖斬り・来栖成哉〉のご主人様の友だ。
地区長の唇がわなわなと震える。汗が流れてくる。
「ひ、弘は……」
成哉の仕組んだ罠により、アイラは妖斬りと一対一の戦いに身を投じていた。

地区の中でも最高の才能を持つ若き妖斬りと。
勝ってくれれば、裏切りはチャラになる。斬ってくれれば帳消しだ。
この数日、何度も空念仏を唱えていた。
まだ裏切りは確定していない。いなかった。でも、けれど――
「んもぉ…鈍い子ねぇ？　私がここに居るのよ？」
巨乳妖魔は肉厚の唇をなめずると、優美な脚を絡めながら目の前に来た。
成哉の呼吸が荒くなり、玉の汗が顔中に浮かぶ。
冷静沈着で理性的な相貌が溶け始め、眼鏡がズリ落ちそうになる。
「本当にわからないのかしら？」
頬に伸びてきた美しい手に反応が出来ない。
息を荒げていると、上目遣いで口を開いた。
「そ・れ・と・も……主人公クンがアタシにどんな〈鍛錬〉されてオチンポ差し出す決心をしたのか……具体的に知りたいのかしら？」
「あ、ああっ……！」
その囁きが、成哉の背筋を震わせた。

ああ。弘も俺と同じく、「あのポーズ」を決めて……！

強かった。将来有望だった。才能に溢れた逸材だった。優秀な妖斬りだった。

でも、と言葉を重ねて、誘惑に堕落した地区長は、妖魔の肉体に視線を這わせた。

でも――目の前の巨乳妖魔は、もっといやらしい。

〈鍛錬〉を終えた妖魔は滴るような艶めきを帯び、まろんだ腰や肉付いた尻、はち切れそうな胸元に濃厚な充実感を漂わせている。

人外の魔性は、搾り取った精で一層輝いているのだ。

そこにはシミ一つなく……

「あら、これ……んもぉ。取り忘れちゃったみたい」

いや、あった。アイラはたわわに実った乳房にシミを見つけ、指で掬った。

むせ返る色香に混じる、オスの匂い――

アイラは、それを見せつけるように舐めとった。

「主人公クンったら、沢山出すんだもの……握ってから最初の〈鍛錬〉は郊外の山奥にて正解だったわ。ビルの中であんなに叫ばれたら、他の妖斬りに気づかれたかもしれないし……お膳立てありがとね、地区長サマ」

ねっとりとしゃぶりながら、満足げにため息をこぼす。
声が聞こえてくる。イメージ出来てしまう。
誰も助けに来ない闇の中で、剥き身の刀身となって四つん這いになる弘の姿が。
股間に忍び込む艶やかな指先に抵抗出来ず、いや抵抗もせずに、だらしない顔で叫んでいる姿――
俺と同じように、ちんぐり返しを決められてよがり狂っただろうか。
「あぁ……あぁ……俺ぇ……！」
妖魔のせん滅を誓った、将来有望な妖斬りだった――
その妖斬りが、巨乳妖魔から「沢山出す」と褒められる射精奴隷に堕ちたのだ。
俺の裏切りが確定した。ハッピーエンドを迎えるべき物語が、最悪の結末に向かってまた一歩進んだのだ。
妖艶な巨乳悪女たちの描く『ハッピーエンド』に近づいたのだ。
俺は地区長なのに……妖斬りなのに……！
「……んもぉ。だから止めなさいって言ったでしょ？　『フリ』をするのは」
「んあっ……？」

だが、アイラに背中を取られると成哉の呼吸が変わった。
ワイシャツの間から胸板に指を伸ばされ、甘い息を吐く。
「一度でも犯した妖斬りには必ず〈巣〉を張っているの。隠し事は出来ないわよ」
髪から甘い香りがして、吐息が耳にかかる。
――むにゅうぅ
「おっ、ひっ……」
背中にたわわすぎる果実を感じ、妖斬りの顔がだらしなく崩れる。
巨乳――それはそれはたわわな果実。おっぱい。
妖斬りの地区長を徹底的に躾けた、ご主人様たちに共通するいやらしさ。
どうしても勝つ事が出来なかった、むっちりと実った乳房の誘惑。
「ふふ、鼓動が上がりすぎよ……？」
たわわに実った果実を押し付けられ、狂ったように心臓は脈打った。
「ほんの数日前、カザネにあれだけ〈鍛錬〉されていたじゃない？　もう狂おしくなってきたの？」
「どうしてそれをっ……あヒっ！？」

股間から、響くような快感。
胸を握っていた手が滑り、成哉がズボンに作っていた苦しいテントを握られていた。
「アタシとカザネは二人で討伐をしているんだから当然じゃない。地区長サマの『あんな姿』や『あの声』……見られていないと思っていたのかしら？」
「それはっ、ぁっ……おぉっ……！」
まるで密会がバレたサラリーマンのようにうろたえたが、股間を揉みこまれると声がオクターブは上がって溶ける。
「自分の部屋だからってあんなに大声出して……カザネが結界を張っていなかったら妖斬りたちに聞こえていたわよ？」
「あぁっ……」
耳元で囁いてくるアイラの言葉が、心臓をさらに狂わせてくる。
「地区長サマって、甘えん坊だったのね？　半月前、貴方はカザネの首に傷をつけたのに……」
「うぅっ……あぁ……言わないでぇ……」
アイラは成哉の股間を見ながら笑い、指をうごめかしていく。

まるで児戯のような手つきだったが、妖斬りへの効果はてきめんだった。
成哉は声もなく天井を見上る。息を乱し始めた様に、クスクスと笑い声が響く。
その指使いは否が応でもこれまでの〈鍛錬〉を彷彿とさせ、後悔と苦痛に歪んでいたはずの顔が切なく溶け始めていた。
グニュッ、グニュッ、モミッ、モミッ。
（う、うぅっ……だ、だめだぁっ……）
股間をまさぐってくる大胆な指使いも乳首を弾いてくる手先も、これでこの妖斬りは堕ちるという確信が伝わってきた。
悔しい。悔しくてたまらない。絶対になんとかしなきゃいけない。いけないのに――
グニュリ。
「んはぁぁっ……」

思い切り握られて、切なげに顔を歪める。
燃えるような悔しさはあっても――アイラとカザネにとって、成哉は「攻略済み」の妖斬りだった。
アイラは成哉の正直すぎる反応を確かめながら、耳朶を濡らした。
「地区長サマでも、真の〈刀〉を鍛えられる快楽を覚えたら最後……そちらの方が熱心になってしまったのよね？」
「ううぅ……」
否定できなかった。
「カザネに〈鍛錬〉されている最中……仲間の事なんか、何も考えていなかったでしょう？」
何一つ、否定できなかった。
「思い出しなさい。ほんの数日前の事なんだから……」
「あ、あぁぁっ……」
耳を濡らす声に導かれるように、思い出してしまう――
怜雄を売ったあの日。自室にカザネ様をご招待した。普通の人間に擬態して入りたいというご要望にお応えするため、胸を破裂させそうな程緊張しながら皆を欺きとおした。

そして艶めかしく微笑むカザネの前で股を開き――〈鍛錬〉を乞うた。食卓の上、眼鏡をズリ落としながら自分で膝を抱えてM字開脚を決め、舌を晒しておねだりした。

少なくとも始まる前までは罪悪感と後悔があったはずだった。だったのに――

命令を立派に果たした妖斬りに、巨乳妖魔は濃密な〈鍛錬〉で報いた。

地区長らしい質実なベッドルームで行われたソレで、彼は一生言う事がなかったであろう「こんなの初めて」という嬌声をダース単位で量産した。

冠位を持つ巨乳妖魔による本気〈鍛錬〉の前に、妖斬りの地区長は翻弄されつくした。

ベロをさらしてよがる回数から腰をわななかせてしまう攻め、背中をそり上げて眼鏡を落とすタイミングまで操られていた気がする。

本当の価値に気づかせていただいた股間の〈刀〉から白旗を上げまくり、闇に潜む美貌の勝利を、理性を守護する男の敗北を何度も披露した――

溶け落ちていく地区長の顔を見つめながら、アイラは豊かな曲線美を絡みつけた。

意地の悪い笑みを、満面に咲かせていた。

「ねぇ、地区長サマ？　仲間とカザネ……どちらが勝つと思う？」

「ど、どっちが……はぁっ……」

ご主人様に負けず柔らかく豊満で、アンバランスなまでに引き締まったアイラの肉体。妖力を感じさせる細く美しい指先が、思わせぶりに蠢いてくる。

蕩けだした表情の端から、涎が零れる。

「ええ。ご主人様のカザネか、地区長サマの大切な仲間、どちらが勝っているのか……当てたら、今日はアタシが〈鍛錬〉してあげるわ？」

ズルリと指が動き、ズボンの中に入ってくる。

「この……地区長サマの大切な、カチンコチンの〈刀〉♪」

「ぉぁっ……ぉぉっ……！」

テントを張りすぎて辛くなっている男の急所を握られ、成哉は身体をしならせた。

（お、おれはっ……）

――お前は妖斬りだろう！　つい一か月前まで使命に燃えていたじゃないか！　それをこんな……三日前もプライドの底を舐めつくしたじゃないか！

どこかで声が聞こえる。そうだ。俺はつい三日前も仲間を売って褒美を頂いたばかり。

兄と慕ってくれていた仲間が攻略されたんだぞ！

それなのに俺は……

むにゅんっ

「あぉっ……」

押しつけられたおっぱいが、むっちりとたわんだ。グラマラスな曲線が、吸い付くように交わった。

「ぁっ……んはぁっ……あぁ……！」

妖斬りは、我知らず舌を舐めずっていた。

つい三日前じゃないっ……もう三日も、だ！

もう三日も、妖魔の〈鍛錬〉を受けていない！　閨の〈鍛錬〉を施していただいていない！

俺を全てから解放してくれたアレを授けてもらっていないんだ！

――お、おいっ！　お前……地区長、来栖成哉っ！　お前は……！

「アタシはわからないけれど……二人の実力を知る地区長サマなら、ちゃーんと予想出来るんじゃないかしら？　どう？」

ささやかれ、撫で回される。張り裂けそうな部分をゆっくりと弄ばれる。

「はぁ――……はぁ――っ、はぁ――っ……」

カザネ様を倒すために妖斬りになった怜雄。使命と復讐に燃え、今やこの地区のエース…

…いや妖斬りの中でも指折りとなった後輩。
対して、青い髪を持つ美しい妖狐。むっちりとしたおっぱいと肉体、優しすぎる瞳を持つ艶やかな妖魔、カザネ様。
背負っている「尊さ」は、圧倒的に怜雄だ。もし怜雄が「主人公」ならば、勝利の女神はきっと彼に微笑んだことだろう。
だってカザネ様は怜雄の復讐心を知り、敢えて堕とそうとしきた魔性だから。
紛れもない、闇の眷属だからだ。
でも……でも……！
――わかっているのか！　これは当てさせるだけじゃない！　お前がどこまで屈辱的な選択を出来るかの踏み絵で……
「……ですっ」
「何、聞こえなかったわ？」
妖斬りの震え声が続いたのは、しばらく後だった。
「……か、カザネ様っ……です……」
アイラの顔が、愉しげに歪む。

「まあ。カザネが勝ってしまうの？」
「は、はい……カザネ様が、勝利しますっ……！」
妖斬りの顔にプライドは欠片もなかった。
「理由は？　まさか〈鍛錬〉が受けたいから……じゃないわよねぇ？」
クスクス笑いながら、アイラは成哉の股間と胸板をまさぐり続ける。
身体をビクつかせながら、成哉は〈根拠〉を述べ始めた。
「い、いえっ……カザネ様の持つ妖祓刀には、全ての妖斬りが当惑します……初見のカザネ様の妖術を避け切るのは不可能っ……怜雄とて……男の、俺たち妖斬りの弱点をカザネ様に奪われるのは必定だからですっ！」
成哉は、これまで培ってきた経験と鍛錬から両者の戦いを想像する。
カザネ様はその微笑みや仕草こそ優しいが……アイラ様以上にしたたかな策略家だ。
肉薄させる事こそがカザネ様の狙い、伯仲することで果実を得る。妖斬りが男である以上、どうしても存在してしまう弱点を確実に狙うためだ。
「じゃあ地区長サマは、仲間が負けるとわかっていてカザネとの闘いに送り出したのかしら？」

「……あ、あぁぁっ！」

最も触れられたくない所を貫かれ、成哉は現実を拒むように首を振った。

「地区長サマと同じ罠にハマって負けると知っていたのに、導いちゃったのね？」

でも、もう戻れない。

「うぅ……は、はいっ！　俺と同じやられ方で……怜雄も敗北すると確信していましたぁっ……！」

あの日、あの夜。雑居ビルの屋上。背後と正面から優美に歩み寄ってくるアイラ様とカザネ様に捕まり、俺はゲームセットとなった。

俺はあの時、近づく仇敵に構える事も、出来た傷をかばう事も出来なかった。

ただ尻を掲げて倒れ伏しながら、ビクつく股間を必死に抑えていたのだ――

ああ……俺は〈勝てれば〉なんて、心の片隅でも思っていなかったのだ。

あろう事か妖魔の勝利を予想した地区長に対し、仕掛けたアイラは満足そうに耳朶を舐める。

「素敵な予想ね。なら、答え合わせをしましょうか？」

声と共に、部屋を半分で仕切るように蜘蛛の巣が広がっていく。

「あ、ああ……」

カチカチ歯を鳴らす成哉の前で、白い蜘蛛の巣が色を帯びていく。

かつてのブラウン管テレビのように図像を合わせ、色を成していく。

深夜。建築途中のモール。誰も居ないはずの闇に沈む広場。

（れ、お……）

心の準備が出来る前に、それは映し出された。

一　誰かの願いが叶うとき

――深夜、頓挫しかけのショッピングモール内にて――

「――らあああああああああああ！」

怜雄は交錯した体を立て直すと、モールの手すりを足蹴にした。

「あら、飛び上がったら的になってしまいますよ？」

対岸に着地した妖狐の笑い声が響いた直後、黄金色の尾が砲丸のように打ち出される。

臓腑を抉らんとする一撃だ。

怜雄は美しい仇敵を見やり、正確に空を蹴る。

「当たらねぇよ！」

「まあ、祓技にはそんな技も……っ！」

目を丸くしたカザネは、言葉を舌打ちで切った。妖斬りが中空をぬたくったからだ。

流星のように飛んでくる尻尾を避け、突貫。紫の切っ先はするすると尻尾をかわし、白磁の首元に迫る――！

金属音。カザネの持つ妖祓刀が切っ先を結んでいた。
青い髪が揺れ、獣耳が震える。乳房が今にも零れそうなほどに弾んだ。
「やりますねっ……」
（こいつ――！）
柔腕とは思えぬ重機のようなパワーで押されるが、超常の剣士もまた世離れした硬さでそれを止める。
膠着はかすかな間だけだった。
カザネの微笑みに暗がりが出来た直後、無数の青白い炎が妖魔の背後に。
九本の尻尾全てがその先端に炎を宿し、包囲陣を強いていたのだ。
「なっ……？」
「ふふ。狐火…ご賞味ください♪」
声の直後、球形の包囲陣は一斉に怜雄に向かって注ぎ込まれた。
抜け道はない死地。妖斬りは光の玉に包まれて――
「――おらぁっ！」
――ズバン！

「えっ…？」

妖狐が、目の前の光景に口を開けていた。

青白い炎は妖斬りの刀に両断され、余勢を駆った妖斬りが迫っていたのだ。

「舐めんなよ！」

それは空間を蹴り飛ばして省略する弘の動きとは違い、這うような動き。何もないはずの空を何度も蹴り、刀を振り下ろす――祓技と呼ばれる超常の力の一つである。

カザネが予想を超えた突貫にたじろいだ刹那、怜雄は美貌の背後に回り込んだ。

「おおっ！」

藁束を切り捨てる音が響き、黄金色の尻尾が舞った。

「――――っ！」

刹那、獣の苦痛が朗々と響く。

「ッ……ァァ、怜雄様ァ！」

「ぐっ！」

体をひねった妖魔の強烈な足蹴りが腹に。トラックと衝突したライダーのように宙を跳ね跳んだ。

（だが……良し！）

歴戦の剣士は正確に己の体を動かし、受け身と祓技の組み合わせで看板をクッションに、エスカレーターを完成前におしゃかにして二階に着地。

（出会いがしら、二本貰った！）

九本の尾の内、二本を根本から斬り捨てる戦果だ。

「……っ、あぁ、はぁぁっ……！　怜雄さまぁっ……！」

視線の先、犬歯をむき出しにした妖狐が細い息を吐く。刀を支えに全身と残った尾を震わせている。伸びた生足に、引き締まった筋肉が浮かび上がっていた。

「はっ、尻尾を切ったくらいで死ぬようなタマじゃねぇだろ？」

「――ええ。そうですねっ……ですがっ……少なくとも先ほどお相手した妖斬り様たちとは、全く違うようです……」

「……っ」

「……ふぅ。ふふ、近づかれない方が賢明ですね」

息を整えるまで十秒に満たなかった。予想以上の回復力だ。

カザネは微笑みを取り戻すと、まっすぐ立ち上がり切っ先を向けてきた。

怜雄もまた、刀を構えて向かい合う。
向き合った瞬間、怜雄は目の前の「美貌」に飲み込まれぬよう息を吐いた。
――妖魔カザネは、妖斬りの宿敵にして男全ての天敵である。
ボブに仕立てられた浅青の艶髪はサラサラと流れ、狐耳とコントラストを織りなす。
青の瞳は優し気に細められ、瑞々しい唇は囁く言葉の甘さを匂わせていた。
シミ一つない肌は「透明度が高い」とも呼べそうな美少女だが、少しでも視線を下げれば――美少女という評価は変更を余儀なくされてしまう。
「ああ……愉しいですわ。怜雄様。熱い殿方の視線を感じます……♡」
囁きながら、指先で自らの輪郭をなぞった。
思わずその指を追いそうになったが、途中で視線を切る。
「どこを斬りすてるか考えてたんだよ」
「あら、首以外も確かめたい所がございますか？　なんなりお申し付けくださいね」
（っ……惑わされるなっ……）
微笑みを見つめすぎないように、怜雄は舌打ちした。
首から下――生唾を飲む曲線美アリ。

綺麗な首筋から白魚のような指先、伸びた足先は可憐な乙女。
だが、デコルテから下はド迫力のグラマラスボディが零れそうになっていた。
なかんずく上乳を零す美しい巨乳は背中からハミ出るサイズで、先ほどからたわみ、はずみまくって視線を煩わせてくる。かすかに見える頂点は可憐なピンク色だ。
むっちりとまろんだ臀部、指が吸い付くような生足から女の色香そのものが匂い立ち、零れそうな和服で覆うのだからたまらない。スリッドからは尻までが覗いている。
無駄一つない美貌。これを見た後は、全てのグラビアアイドルはかすんでしまうだろう。
だがそれは裏腹に潜む貪欲の鏡写しでもある。
男の理性を狂わせ精を貪る魔、妖魔。
どれだけ美しくても、切っ先を鈍らせる理由はないのだ。
怜雄はもう一度大きく息を吸い、前を見据える。
そんな宿敵が美しい妖祓刀を持っている。
視線に気づいたのか、カザネはクスリと笑った。
「これは私の愛刀ですわ。差し上げる事は出来ません」
「欲しくはない。ただ、そこにあるべきじゃないんだよ」

「あるべきでは……ふふ、そうですか」
残った七本の尾っぽを扇のように広げ、先端に青白い幽鬼の炎を現出させた。
「正直申さば、今の連撃で倒す事が出来ると思っておりました……ますます、怜雄様の事が欲しくなってしまいましたわ」
「……欲しい？」
刀を握っている指が悲鳴を上げた。巨乳妖狐はひるむどころか、小首をかしげて唇をすぼめる。
「ええ。怜雄様ほどの剣士であれば……我らの閨での〈鍛錬〉、ご存じですよね♪」
「っ……誰に向かって……言ってるつもりだ……」
「誰に？　もちろん怜雄様にですわ？　ふふ♪」
袂で口元を隠しながらクスクス微笑むカザネ。無邪気で、悪気など全くない笑み。
だが今ここにおいて、絶対的な悪の証明。
「私は多くの妖斬りを〈鍛錬〉させていただきました。冠位を授かり、やがて来る『素晴らしい夜』のためにご奉仕をさせていただております」
恐るべき言葉の羅列も、うまく入ってこない。

――なんだ、こいつは？

兄を殺しておいて、俺を欲しいだと？　なぜ俺がここまでの力を手に入れたのか、想像も出来ないのか？

「随分、余裕じゃねぇか……！」

「余裕？　いいえ、これは……」

「黙れっ……！」

――あの妖魔は強い……！　ここは俺に任せて早く逃げるんだ！

身を挺して逃がしてもらってから、俺は血の滲むような鍛錬を続けてきた。その果てに、妖斬りの中でもトップクラスの実力を身に着けたのだ。

その鍛錬が何故かもわからないのか？　貴様が冠位だからなんだってんだ？

こいつらは悪魔だ。化生だ。絶世の美貌を備えているが、しょせん外見だけの存在――

「何かおっしゃりたいのですか？　聞こえませんよ？　刀が震えているようですけれど……」

わざとらしい挑発に、奥歯が悲鳴をあげる。

「お前を倒すためにだ、カザネ！」

声そのものが焦げているような熱をもって、剣士は仇敵に叫んだ。

「お前のそのクソデカパイに刀を突き立てるために、俺は鍛えてきたんだよ！」
目の前の青髪の妖狐を倒すため。そのために妖斬りとなり、鍛えてきたのだ。
あの時と全く同じ、艶やかで美しく、いやらしい妖魔を――
「滾るような恨みの炎ですね。美しくて混じり気のない……それが昏さを湛えた時、どのような光になるのか――」
瞳を細めたカザネは動揺の素振りも見せず、ただ潤んだ唇をゆがめた。
「必ず、斬ってやるよ！」
目に炎を宿らせて、怜雄は跳んだ。
――容赦はしない。一気に決める！
「――〈奔れ〉！」
剣士の叫びと跳躍。
その速さに、妖狐もまた応じようとした。
尾先の狐火が揺れ、エネルギーが満ちていき――
「……なにっ！？」
だが、妖狐より発されたのは驚きだった。

狐火は我を失って四方七方に飛び去り、建築会社の恨みを買うためにシャッターや壁にぶつかったのだ。

さらに妖狐をたたらを踏んでフラつき、尻尾が力なく揺れる。

「っ？！　私に、何を……」

「お前も、ただの妖魔だってことだよ！」

「……まさか、さっきの斬り口から――！」

カザネの笑みが崩れたとき、怜雄は一気に肉薄した。

零れ落ちそうな白い乳房を目標に、突進――

即断。カザネは一挙に飛び去ろうとするが、すかさずそれを追いかける。

飛びずさった妖狐の臀部を狙い、一閃。

「――っ！」

尻尾がどさりと落ちて砂と消える。

その切り口がふさがり始める前に、視線で射殺すように見つめて詠じる。

「〈奔れ〉！」

声の直後、紫色の稲妻が、切っ先からカザネへと迸った。

「――――っ！」

モールに、鵺の声が響いた。

「……こ、この！」

カザネが悲鳴を噛み殺し、残った尾をムチとしならせ怜雄に降りかかるが、動きも威力も、先ほどより鈍っていた。

「この程度かよっ！」

五つの連撃をステップを踏んで躱した怜雄は再び肉薄。スリットからむき出しの生足に向け、一閃。

手ごたえと――緑の鮮血。

砂埃が収まった時、すでに妖魔はそこにはいなかった。

「逃げ足は速いようだな」

「え、ええ……久しぶりに、妖斬りの恐ろしさを、実感させていただいておりますわ……」

距離を取ったカザネの右足は、ぱっくりと割れていた。カザネは刀を支えにしゃがみ、手をあてがって流血を抑えていた。

「てっきり尋常な剣士様と思い込んでおりましたが……まさか搦め手の使い手とは……」

「もうわかったのか？」
「ええ。我ら妖が決して浴びれぬもの――日輪の輝きを流し込んでくる祓技でしょう？」
（ちっ……早いな）
「そうだ。お前らのような信念の無い獣には、耐えられない光だろうよ」
「信念……ふふっ……そうですか」
剣士は気取られぬようにふるまったが、カザネに祓技を言い当てられた事に微かな動揺を覚えていた。
妖祓刀を介して太陽の光を流し込む。無論、如何に妖斬りとて日輪の清浄は完璧に出力出来ない。ごく少量を切り口から流し込むだけだ。貯めに貯めた、昼間の光。
それでも、日ごろ太陽を浴びない妖魔にとっては術の散乱、激しい痛みを及ぼす毒となる。
鍛え上げた体術・剣術とこの祓技を合わせて敵を討つ。それが卯月怜雄のスタイルだ。
流し込むまで効果を発揮しない祓技。だが、カザネは明らかに油断していた。
奴が何の術を使ってくるのかはまだわからないが……待つ必要もない。
片膝をつき、息を荒げる妖魔に切っ先を向け、怜雄は言う。
「てめぇには既に普通の妖魔への三匹分は流し込んでやった。このまま殺す」

「……そこまで、私を思ってくださっているのですね」
カザネの弱々しい皮肉は、無視できるか細さがあった。
一瞬だけ目を閉じて、怜雄は兄の姿を思い浮かべる。
強く、凛々しかった兄――
（兄さん……力を！）
念と共に跳躍。風を頬で感じ、姿勢を低く跳ぶ。
対するカザネは足をふらつかせ、尻尾を全て地面に寝かせている状態。獣耳も寝ており、へべれけの遊女とさして変わらない。
今度こそ、あの妖魔に刃を！
「――おおっ！」
気合と共に一閃。勝利まで、あと一歩――！
「……〈斬れ〉」
だが、カザネの言葉が響いた刹那。妖魔の持つ妖祓刀が奔った。
「っ？！」
甲高い金属音が響き、細い首を狙った刀は防がれていた。

カザネは俯いたまま、とても力を籠められぬ体勢で、しかし万力の力で怜雄を阻んだ。
怜悧な切っ先が玲雄の刀を辷り、迫る。
身をよじって躱す。怜雄は間髪入れず、再びの一閃を光らせる――
「くうっ？！」
だが、それもまた防がれた。
「素敵です……」
刀を持つ右手以外、いや右手にすら力が籠っていない。
風に揺れる柳のまま、カザネは刀身を振り下ろしてくる。
首元に迫る刀をかわしたが――剣舞が襲い来る。
モールに、激しい剣劇音が響き渡った。
（なんだ、この太刀筋は？！）
まるで妖斬りのソレ。しかも並大抵のものではない。鍛錬に鍛錬を重ねた剣士のものだ。
カザネは太陽の清浄に灼かれているはずなのに、それを物ともせず、まるで妖祓刀自体が意思を持ったように惚れ惚れする太刀筋を披露してくる――
「はっ――！」

怖気が走った。妖狐はむき出しの生足で屈曲のスペクタクルを披露、白い乳房をド迫力で弾ませた。

カザネの全身が刀と連動している。

もう、俺の祓技を克服した――!?

――妖魔の持つ刀が走った直後、今度は剣士がその場から消えていた。

「はっ……はっ……!」

「――ふふ、見事な身のこなしですわ。絶対に斬れると思いましたのに」

荒くなった息を継ぐ怜雄に、カザネはにっこりと笑いかけてきた。

「てめぇこそ、あちこち弾ませながらっ……」

「あら、気になってしまいますか?」

「……邪魔だと思っただけだよ。クソデカパイが……」

「まあ。お口が悪い♪」

クスリと微笑む。動揺のあまり、おかしな事を口走ってしまったかもしれない。

「私のクソデカパイが邪魔かどうかはこれからたっぷり教えて差し上げますが……お怪我は大丈夫ですか?」

「はっ……脳みその中身もデカパイに吸われたのか？　こっちはお前らと違うんだ。ちゃんと、生きてるんだよ」

「まあ、まあ……ふふ♪」

（避けきれなかった……！）

かすり傷だが、怜雄にとって衝撃だ。

確実な勝機。毒を三倍も流し込んでからの打ち合いで上回る事が出来なかったのだ。

いや、むしろ最後のは――

怜雄はゆっくりと立ち上がる。無駄な思考は斬り捨てるんだ。

俺の祓技は確実にカザネに効いている。

決して油断せず、極限まで集中力を高めていけばいい。

「あら？　もう傷はよろしいんですか？」

クスクス笑ったカザネに、歯ぎしりして返す。

「さすがにこの程度で止まっちまうほど、弱くはな……っ？！」

その瞬間。カザネに言い返した瞬間。

怜雄は己の右足を見て、雷を受けたような気分になった。

（傷が……ない？！）

「ふふ……えい」

驚いた間を突いて、カザネが肉薄してきた。

呼吸が止まる。

遅れた初動。数戟の打ち合い。

「っ！？」

右肩、脇腹に熱を感じ、引きさがる。動揺を狙われてしまった。

口惜しさに表情を歪める前に、自分の体を確認する。

確かに右肩、脇腹の服が切れていて血が流れている。やっぱり斬られていて――

「な――？」

だが、それは怜雄の見ている前でふさがっていった。

衝撃が静寂に変わり、妖魔のこぼれるようなクスクス笑いだけが響く。

こんな祓技は存在しない。

となれば――目の前の妖魔しかいない。

狐火、尾、刀の異常な冴え。そのどれでもない力をカザネは持っている――？

「そろそろでしょうか……」
カザネはそうつぶやくと、零れ落ちそうな肉体からむせかえる色香を匂わせた。
怜雄が呆然と見ている前で、カザネはまっすぐと妖祓刀を構え――
レロッ
妖祓刀の刀身、剣の鍔近くを舐めた。
――ヌルリ
「うっ？！」
脇腹を、柔らかい物に舐められた。
とっさに手で覆うが、何もない。
カザネはそんな怜雄を見て微笑むと、ぴちゃぴちゃと舌で刀を濡らしていく。
ピチャッ、ピチャピチャ……
「っ……？」
脇腹――人間がどうしても脱力しそうな所に、舌の感触。
怜雄の表情の変化に、妖魔は愉しげな笑みを返した。
「あらあら？　どうしました怜雄様？　表情が……殺し合いとは思えませんよ？」

「て、てめぇっ……！」
（まさか……俺に妖術を？）
微笑む巨乳妖魔の美貌に、妖斬り十五地区のエースは背筋に震えが走ったのがわかった。
――走って、しまった。
「――はぁっ！」
怜雄は気づいたら跳んでいた。微笑んだまま刀を構えたカザネと斬り結ぶ。
今のカザネは尻尾も狐火も使えない。今、決めなければ！
カザネの脇腹が空く。突如浮かんだ明白な隙。
（ここで、決める！）
妖斬りの咆哮がモールにこだました。
振るった刀に確かな感触。緑色の血しぶき。
今度こそ――！
「――ふふ」
だが、兄の命を奪った妖女は笑っていた。
「くあっ！」

鋭い痛みが、脇腹を駆け抜けた。
甲高い音を残して離れた二人は、痛み分けの様相を呈していた。女は脇腹を斬られ、男は肩を斬られている。
脇腹はブラフだったのだ。
でも、止まったら負ける――！
「喰らえっ！」
怜雄が叫び、己の鍛え上げた祓技――日輪の力を流し込む。
「っ……！　は、ははっ……いいですよ、怜雄様……！」
ガクリと肩を震わせ、きわどい和服がこぼれそうになる。
しかし――そこでカザネは踏みとどまった。
そのまま、美しい指で刀身を撫で上げてくる。
「あっ？　ああっ？！」
怜雄は首元から胸板を、甘く撫でられていた。
刀の前で、花と詰むようにカザネの五指が閉じられる。
キュッと乳首がつままれる感触。

敵前にも関わらず、怜雄は右目を閉じて口を噤んだ。
「ふふ……猛々しく滾る怜雄様の秘めたお顔……とっても可愛らしいですよ？」
カザネは微笑むと、刀身に当てた指をうごめかせてくる。
「……ふっ……ぅっ……」
思わず、脂汗の滲む顔がゆがんだ。
「まだ完全とはいきませんが……大分なじんでいますね」
腹を揉まれ、へそまわりをくすぐられ、脇腹を愛撫される。
胸板と乳首を、美しい指が撫でてくる――
「六、七割といった所でしょうか……」
（ふざけんなっ……こんな、悪戯のような妖術で……！）
その言葉に怒りが沸き上がるが……艶めかしい指使いは、憎らしくも妖魔だった。
男である怜雄にとって、垂涎ものの手つきである事に変わりはない。
（力が、抜けそうにっ……！）
――類感呪術。
妖祓刀に血を吸われるほど、あの刀と己が同化させられている。

血を吸えば吸う程、妖斬りを追い詰める妖祓刀。
それが、あろう事か妖魔の手にある。
そう、目の前のデカパイ妖魔は冠位を名乗った。妖魔の中でも選りすぐり中の選りすぐり――
「もうお気づきですよね？　これは私の愛刀。妖斬り様と戦う時専用の妖祓刀ですわ」
怜雄の視線に気づいたのか、カザネは囁く。
「もっともこの術が、信念ある妖斬り様に効くかはわかりませんが……ふふふ♪」
その笑みに、背筋がまた震えてしまう――
「……だ、黙れっ！」
痛烈な意趣返しに、怒りを我慢できなかった。それが、動揺を気取られる結果しか招かなくとも。
カザネだって、あの妖狐だってダメージは負っているはずだ。勝つ方法を考えろ。祓技を発動し、奴を無防備にして斬る。それしか道はない。
でも――
（くそぉっ……）

――笑みが、心底憎らしい美しい笑みが崩れていない。崩せていない。
カザネの美貌は祓技を喰らってのぼせたように赤らんでいて、目に毒すぎる色香を放つ肢体は今にも服から零れてしまいそうだ。
（それにっ…）
怜雄の目線はグラグラと揺れていく。痛みとどうしようもない疼きが、意志を鈍らせてくる。無意識のうちに、盗み見るようにチラチラと視線が落ちる。
……アレ。大きな大きな、それは大きくて美しい、釣鐘型のおっぱい。デカパイ。
歩くたびに弾みまくり、視界を悩ませてきやがる。
むっちりとたわんだ谷間なんて、色香が匂いそうな程深くていやらしい――
「どうしました、怜雄様？　息が……とっても荒いですよ？」
無邪気だったはずの妖狐の瞳が、艶やかに細められた。
すぐに歯ぎしりして、怜雄は妖魔を睨んだ。
（お、落ち着け！　今、俺は殺し合いをっ……こいつは、兄貴の仇なんだぞ！）
クスクス笑うカザネに言い返すことが出来ない。
妖斬りは今、決して考えてはいけない事を考えていたのだから。

妖斬りに回り始めた快楽が、絶世の美貌を誇る巨乳妖魔のカラダが、必死に押しとどめる本能と欲望を炙ってくる。

考えろ。落ち着いて考えるんだ。

長期戦……だめだ。それはいけない。

いずれ、祓技の効力は衰えてしまう。斬りあっている最中に尾と狐火を発動されれば、一気に不利になる。危うい物になるだろう。

なによりも――

青髪妖魔は微笑みながら刀身を撫でまわし、こちらに快楽を与えてきている。

「……」

このまま長引けば、また何回か斬られてしまえば、恐らく刀に仕込まれた妖術は完全に作動する。

あの妖祓刀は、完全に俺の感覚と同化する。

ああ、カザネの事だ。間違いなく笑顔で指を下に降ろして術を仕掛けてくる。

妖祓刀の根本、柄――あれは獲物にした妖斬りの股間を象っているに違いない。

つまり完全に同化した瞬間――俺はカザネに急所を握られてしまう事になる。

もしそうなったら。俺は――

しばしの沈黙の後、妖斬りは宿敵に向け刀を構えた。

「……ふふ、戦略はまとまりましたか？」

それには答えずに、まっすぐ剣を構えた。

（……俺は兄貴の仇を取るために鍛えてきたんだっ……！　邪念を払え！　こんな妖術には負けねぇ！）

底知れぬ笑みを浮かべる美貌の前、妖斬りは警鐘を怯懦として押し殺す事を選んだ。

刹那浮かび上がった光景は、何かの間違いとして切り捨てた。

一瞬の静寂が、モールに満ちる。

「――おおおおっ！」

「っ！」

仕掛けたのは剣士。一挙に妖魔へ肉薄しての一閃。

純粋な一太刀だが――それは、これまでの鍛錬を思わせる鋭さと重さを持っていた。

妖魔の切っ先はそれに過たず応じてくる。機械じみた正確な応撃――

「なっ――」

だが、妖狐の笑みは固まっていた。
怜雄の刃は直前で止まり、そこから滑るように身をかがめ一挙に斬り上げる。
永い時を生きた妖魔ですら見ぬ常軌を逸した身のこなしで、完全に裏をかいた。
「ですがっ！」
妖狐が歯を軋らせる。妖祓刀だけが、自動機械のように追いかけてくる。
そうだ。これがあるから追わなくても良いと判断したのだろう。
（……だから、ここだ！）
その無慈悲な切っ先――怜雄はそれをあえて無視した。
斬り合わなかった時点でそれは見えている。
身をよじ曲げ、空間から抜くように走り、妖魔に残った尾を射殺すように見る。
「っ……！」
腹に強い熱。斬られた。どれくらいか――？
（でも……！）
「おおおおおお！」
「なっ……あああああああああああああっ！」

カザネの悲鳴。
鍛え上げてきた怜雄の刀が、黄金色に輝く妖魔の尾を斬り飛ばしていく。

一本、二本、三本――！

――ガキィン！

「くうぅっ！」
「あはぁぁっ……！　あぁ……！」
荒い息が、二つ交わった。
妖祓刀同士の激しいつばぜり合いが、完成を待たず壊れ始めたモールに響く。
「ふ、ふふふ……怜雄っ……様ぁ……！」
妖魔の吐息は、鉄を溶かしそうな温度だった。
「まさか、すぐさまブラフをやり返されるとは……思いませんでしたっ……」
「お前の刀は、体勢を崩してもすぐについてきてくれるっ……便利な機械なんだろ？」

目の前。微笑みながらも獣の歯をのぞかせるカザネに笑いかけた。
いつでもどこでも、カザネが握ってさえいれば抜群の冴えで標的を追いかける刀。
ならば、敢えて隙を見せれば誘導できるのではないか――
その目論見は当たった。平の剣士ならば到底無理だったろうが、怜雄にとってそれは隙だった。
「こんなに斬られたことはありません……ふふ、尻尾たちの恨みが軋っていますわっ……」
「はぁっ……聞こえねぇな……！」
九本あったカザネの尾は、今や三本しか残っていない。
怜雄は見事、冠位持ちの妖魔に六つの傷口を作り上げたのだ。
ここまでくれば遠慮などいらない。全ての力を注ぎこんでやればいい――！
（見せてやる……！）
怜雄は深く息を吸い込むと、高らかに宣言した。
「――『奔れ』！」
「っ……！？　ぁ……あぁ……！」
妖魔に祓技が迸りだす。紫の刀身から、妖狐の中へと太陽の清浄が流れ込んでいく。

「――っ――ぉあ――っ――」

カザネは俯き、がくがくと震えだす。絶頂についていけない女体が痙攣するように、むき出しの生足が揺れ、服が衣擦れを起こして舞う。

「あ、あぁぁぁぁあぁぁぁぁぁ……！」

その姿勢は崩れていく。視線が揺らいで、涎が零れている――

ここしかない。

「お、らぁっ……！」

怜雄は、万力の力を込めて押し込んだ。

「く……あぁぁぁ……！」

妖祓刀を持つ妖魔の柔腕が揺れる。細い手首が、白魚のような優美な指先が震える。

「カザネェ……！」

「ぁ……ぉ……っぉぉぉ……！」

（ここで、決めるっ……！）

退路はもう無い。俺が斬り飛ばしたかった妖魔の首は、もう目の前にある。

――ですが確かに弟様はまだお早いですものね……ここはやはりお兄様である理仁様から、我が妖技をご堪能いただきましょうか？

微笑みながら兄貴を見つめ、奪っていった美しい妖狐。

優しく強く皆の信頼を得ていた憧れの兄のため、必ず復讐すると誓った相手。

「くっ……おぉっ……！」

必ず斬ると誓った。斬らなければならない。斬れなければ、ならない！

（兄貴っ……力を……！）

全ての力を籠める彼は、トドメの一振りを手繰り寄せていく――――――――――

――――――――――

「っ……」

「……っ……っ！」

一瞬なのか、永遠のなのかわからない。どれほどの時間が経ったのだろうか。

お互いが全身全霊を込めたつばぜり合いを行いつづけた時間。
その終わりは唐突に訪れた。
――ガチンッ
「っ……！？」
……今のは、なんだ？
カザネの右手の震えが――止まった？　刀を、正確につかんだ？
「おっ……らぁ……！　おらあぁ！」
怜雄は咆哮した。永遠の輪廻に思える一刻から抜ける呪文を唱えるがごとく。
この永遠から抜ける方途は一つしかない。この妖魔の首が両断されるのみ――！
「……はぁっ……はぁっ……あぁぁ……」
目の前の光景が受け入れられなかった。
カザネの荒れた呼吸が一定のリズムを取りはじめた。さらに震えは周期を作り始め、収斂するように生脚の震えが収まっていく――
そして刀の柄前で震えていた左手の指が――そっと刀を握った。
一拍の沈黙の後。

「……妖、斬り……卯月怜雄、様……」
「っ――――！」
勝気な眉尻が驚愕に揺れる。
妖斬りは、響く声を幻聴だと思いそうになった。
「おっ……おおお！　うあああぁ！」
目の前の光景を、どこか遠くの風景と錯覚しそうになった。
（あり得ねぇっ！　今のは、今のは……！）
――でも、永遠でも、一瞬でもなかった。幻聴でも、風景でもない。
妖斬りが祓技を流し込み続け、妖魔がそれを喰らいながらつばぜり合いを続ける戦いの刻であり――
「――――見事でした……心から……感服致しましたわ」
「おっ……あああああああああああああああ！」
――妖魔が、妖斬りの祓技を克服するまでの時間だった。
「てめぇっ……一体、何体分の祓技を……！」
「ふふ……そうですね。何せ信念のない獣ですから。教えてくださいますか？」

手は確かに震えている。顔は上気している。だが、艶やかに微笑んでいる。

千載一遇の機会を、逃してしまった。

「ふざけんなよっ……！」

（九体……いや、それ以上のはずなのに……？）

己の妖祓刀に籠められるだけのものを全て注ぎ込んだはずだ。それなのに凌駕されてしまった？

成哉の言う通り、復讐に囚われず集団で機会を――

（ち、違うっ！　何を考えてるんだ！　つばぜり合っている！　まだ、勝機はある……まだ……）

「そうですよ、諦めてしまってはいけません。怜雄様？」

「な、何を言って……」

「今度は私の番なんですもの」

「っ……！」

憎らしい程に、優しい笑みだった。

――ドクン、ドクン、ドクンッ――

心臓のバク付きがうるさい。斬られた腹は、既に痛みがない。
カザネは優美な笑みを浮かべつつ、そっと鍔を握った。
「ぅっ？！」
瞬間、腰をつかまれたような感触が走り、頬がひきつる。
青髪の巨乳妖狐が、目を細めて舌なめずりした。
「ふふ、良い仕上がりです……これなら仕掛けられます」
「……おっ……おおおおっ！」
怜雄はカザネの笑みに、怒声を発しながら力を込めた。
先ほどまでの洗練さとはかけ離れた、焦り力んだ、叫びまかせの動き。
カザネはらしくもない怜雄の一刀を優美に受け流しながら、そっと口を開く。
「また、感服させてくださいね？」
カザネは怜雄の目の前で、刀の根本に手を滑らせる。
白い五指が、固くなったペニスを包むように柄頭を握った。
――キュッ

「――――おっ……？！」

――その瞬間。怜雄は股間を見下ろしてしまっていた。

雄として拒めない感触が、股間から響いている。この死闘に似合わない甘さ。

もうごまかせない妖斬りに、巨乳妖魔は意地悪く微笑んだ。

（ち、ちくしょっ……そんなっ……）

仇敵の艶やかな笑みに、妖斬りは受け入れるしかなかった。

俺は、カザネの術中に完璧に嵌っちまった――

「……捕まえましたよ？　怜雄様♪」

残忍な妖魔は微笑むと、美しい指をひらめかせ始めた。

勃起した亀頭をよじるように、グチュリグチュリとよじりまわし、カリ首をめくってしごき回す。

――グチュッ！　クチュクチュクチュクチュ……

「……ぁ、あぁっ…あぁあぁ――――！」

妖魔の悲鳴とは違う妖斬りの声――嬌声――が、モールに響き渡った。

「……ぁっ……くぅっ……！」

歯を食いしばり、腰のガクつきを抑えながら刀を必死に握る。

（た、耐えろっ！　本当に握られてるわけじゃねぇっ！　これは殺し合い、相手はあのカザネなんだぞっ……！）

そう言い聞かせ、呼吸を整えようとし――

――クチュックチュッ、グチュッ、グニグニ……！

「ぉはぁっ？！　おぉっ？！」

股間をビクつかせ、天を仰いでしまった。

裏筋を二本指で撫で上げられている。ひきつった袋が指で包まれ、からかうように揺らされている。甘くて柔らかい細指が、股間に伸びている。

わっかを作って、勃起しきったカリの所をコリコリとしごき上げられていく。

「ぁっ、あぁぁ……！」

（くそっ……こんなぁっ……！）

それは、あまりに完璧な思い込みだった。
表情が戻らない。脂汗に塗れ、息が乱れる。押し込めていた刀が、震えてしまう。
「ふふ。どうしました怜雄様？　信念に溢れた妖斬り様なら、これくらいの妖術は耐えられますよね？」
「っ……！」
愉しげな声に、奥歯が折れそうになる。怒りと決意を込めて、微笑む妖魔を睨みつける。
だが――カザネが指を握っているだけで抜群の冴えと重みをもつ妖祓刀は、ぴくりとも動かない。片手で握っているのにだ。
最適解は離脱。だが、離脱したら最後、つばぜり合う事すら出来ないだろう。
いや――離脱したら最後、このデカパイ妖狐はわざとらしい笑みを浮かべたまま、たっぷりと俺のチンポを扱きまくってきて――
（ち、ちげぇっ！　だからっ……こんな、ちっ…くしょぉ！）
退路はもう無いのだ。
カザネはクスクスと微笑みながら、そっと指を閃かせていく。
腫れ上がった亀頭が、柔らかい二本の指でニジニジとよじられる。

折り曲げられて、裏筋を根元から撫でられ、袋をグニュグニュと揉みまわされる――
「お、おひっ！？　……くあぁぁぁ……！」
滑稽なほど情けない声が、復讐の剣士から漏れ始めた。
されていないはずなのに、粘ついた水音まで聞こえきてしまう。
怒りと決意で折れかけていたはずの奥歯が、緩みそうになる。
「あらあら……力が弱くなってきましたよ？　まさか怜雄様ともあろう妖斬りが……
オチンチンが気持ち良くて、戦いに集中できないんですか？」
「て、てめぇっ……んあぁっ！？」
思わず睨みつけた時、根本から引っ張り下ろされるようなコキ下ろしを食らった。
腰がガクンとビクつき、カザネがクスクスとほほ笑んでくる。
目の前でカザネが柄を指で挟んでコキ下ろすと、その通りの蠢きが怜雄のペニスで再現されていく。
「ふふ……怜雄様？　私は理仁様の仇なんですよね？」
「ぉっ……あぁっ……！」
「確か……私をかならず斬ると豪語されていた気がするんですが……違いましたか？」

「くぅぅ……うぅぅぅ！」

「それとも、オチンチンが気持ちよくなると忘れてしまう程度の覚悟だったんですか？」

わざとらしい残念な声。ほほえみに嗜虐的な光が混ざる。意地悪く囁いてくる。

本当に、憎たらしい妖魔だった。

汗が目に入って、見えなくなりそうだった。視界がにじまないように何度も首を振る。

（ちくっ……しょぉ……！）

落ち着け。これは術なんだ。強い信念さえあれば耐えられる。さっき誓ったじゃねぇか！

それなのに……それなのにカザネにチンポを握られたくらいで負けるのか？　この悪魔はずっと探していた妖魔、兄貴の仇なんだぞ！

いけ好かない妖魔の思い通りになるのか？！　このデカパイ妖魔の術くらい、上回って……

グチュッ！　グチュグチュグチュグチュ……！

「んはぁっ！　あっ……ああっ！？」

両手で竿をひねられ、亀頭を揉み回された――そうとしか思えない感覚が、ペニスに迸る。

「怜雄様？」

「ぅっ……くうぅぅっ……！」

上回る、上回りたいのに……それなのに……！

「くぅっ……あ、うあぁぁ――！」

（なんでっ……こんな、気持ち良いんだよぉ！）

このままでは、刀を落としてしまう。股間を両手で覆って、うずくまりたくて仕方がない。

尻を高く掲げて押さえつけないと、どうにかなってしまいそうだ。

あと一歩だったのに。このままじゃカザネに負けてしまう。

兄貴の仇に、倒したくてたまらなかった妖魔に返り討ちにされる。

カザネが施す快楽の妖術に負ける――考えられる中で、最悪の敗北。

（ありえねぇっ……！　こんな、こんな事！）

最悪の未来予想図を振り払いながら必死に力を籠める妖斬りの顔は、汗まみれだった。

「あぁ……たまりませんね」

その顔を見ながらカザネは小さく笑い、舌を這わした。

「ねぇ怜雄様？　とても苦しそうなお顔ですよ？　大丈夫ですか？」
優しく促してくるような声音に、怜雄は目を見開く。
「ふざけんな……これくらいで、勝ったつもりになってんじゃねぇ……まだ、終わってねぇ……！」
燃え滾る怒りと共に、美しい仇敵を睨みつけた。
「ふふ……終わる？　何をおっしゃっているのですか？　まだ始まっても居ませんよ？」
（なっ……）
だが――返ってきた笑みと言葉に、背筋が凍った。
「まだ、怜雄様に理解ってもらっておりませんもの。自らが何者なのか」
艶やかな視線から、目が逸らせない。
「妖斬館の鍛錬だけでここまで鍛え上げてきた怜雄様です。私の肉体をもって怜雄様を〈鍛錬〉させていただければ、一体どこまで磨き上げられるのか……今から愉しみで仕方ありません♪」
みずみずしい唇から紡がれる言葉に、零れ落ちそうな肉体の艶めかしいツヤに、視線が吸い寄せられてしまう。

見せつけるように、カザネが腰をひねった。
ユサッ……
ゆったりとした和服からこぼれるように、むっちりとおっぱいが揺れた。
「ぁっ……」
匂いたつ色香が、頭の奥まで漂ってくる。
柔らかくたわわな乳肉から、目が逸らせない――――――
「必ず握ってさしあげますからね？　怜雄様のオ・チ・ン・ポ……♪」
（う、あ……）
蕩けるようなささやきに、妖斬りのズボンが脈打つように揺れた。
「――ふふ」
怜雄の視界の隅で、斬り残していた三本の尾が動いた。
「しまっ……！」
気づいたときには、遅かった。
怜雄が慌てて刀を構えた時には、きらめくような軌跡が地面から弧を描いていた。
青髪妖狐の一閃が、妖斬りを両断していた。

「――――ぁっ……」

彼の手から、妖祓刀がするりと零れ落ちていく。右腹部から左肩まで灼熱が走り抜け、膝から崩れ落ちていく。耐えられる痛みではない。

でも、まだ――これはすぐに消える。指に力を籠めれば――諦めるな――！

「うぐぅっ？！」

だが妖斬りは、次の瞬間には体をクの字に曲げていた。

寸分の暇なくカザネの尾にへそを打ちぬかれ、さらに四肢へ連撃。

よどみなく、そして正確だった。

視界が飛び上がる。自分の身体が打ち上げられる。

建設途中の天井から、空が見えた。

復讐の妖斬りを使った〈花火〉が、高々と打ちあがっていた。

「ぁっ……ぁぁっ……」

（ああ……俺っ……）

天井に映り込む自身の顔は、先に結果を受け入れたみたいに弛緩していた。

その下で微笑むカザネが待ち構えているのがわかるが、ピクリとも力が入らない。四肢は

ただ宙を泳ぐばかりだ。受け身も取れないが、怖いくらいに落下の恐怖はない――

――ちくしょう。カザネの攻撃、正確すぎるじゃねぇかよ――

「――がぁっ！」

妖斬りが覚悟してしまった通り、ため息が出るほど「綺麗な」手並みだった。

落下途中に両手を束ねられ、両足を分けてしっかりと捕縛。地面まで緩やかに減速し、キュッと引き締ぼって人体の遊びを殺す。

怜雄もまた、自分の脚で着地出来なかった。

――ガンッ！

少し遅れて、遠くの床に怜雄の妖祓刀が突き刺さる。

カザネが刀を収めると、怜雄の腹の傷は消えた。

目の前を見て、青髪の巨乳妖狐は満足そうなため息を漏らした。

「……見事でしたよ。怜雄様」

十五地区の妖斬りを使った、三つめのオブジェが出来上がっていた。

――ここに、妖斬り卯月怜雄と妖魔カザネの死闘は決着した。

「ぁっ……あぁぁ……ちくっ……しょぉ……」
妖斬りの顔は屈辱にゆがみ、妖魔の顔は微笑む。
ここから妖祓刀を手繰り寄せる事も、尻尾から抜けだす技も持ち合わせていない。
つまり逆転の手段は――
（ああ、違うっ！　そんなわけ、そんなわけねぇっ！）
ずっとずっと、カザネを討伐するために鍛えてきた。あの日の願いを叶えるために、今日の日のために妖斬りになったのに――
細めた横目で冷徹にこちらを観察するカザネに気づかず、怜雄は首を何度も降って口惜しさをまき散らす。
復讐の妖斬りの様に笑みを浮かべたカザネが、指を優美になびかせる。
「ぁ……待っ……！？」
とたんに妖斬りの両足がガバリと開かれ、股間がカザネのおっぱいの高さへと運ばれた。
艶やかな妖狐は柔和な笑みで妖斬りの股間を観察しつつ、満足そうなため息を漏らす。
「あの日……怜雄様を逃がしてから、ずっとこの時を願っておりましたわ」

「っ……！　や、やめろぉっ！　ふざけんなっ……あぁぁっ！　やめろぉ！」
「申し訳ございません。私も待ち望んでいたことですので」
カザネの動きを阻むことはもう出来ない。その笑みに抵抗する事が出来ない――
「あの日の誓い……やっと実現致します」
「ぅ、ぁぁ……あぁぁぁ……！」
カザネが零した言葉に、悔しさが振り切れてどうにかなりそうだった。
（嘘だっ……ああ、ああぁ！　兄貴っ……！）
それは、俺が言うはずだった言葉――
だが二人の願いが拮抗するのなら、叶うのは勝者のソレのみ。
カザネはゆっくりとズボンのジッパーに指を伸ばしてくる。願いを叶えるために。
（ちく、しょうっ……ちくしょうっ……！）
怜雄の眉が、溶けるように曲がった。
「ふふ……ああ……嬉しいです……」
「やめっ……あぁ……」
屈辱と快楽に挟み撃ちにされた妖斬りの叫び声が、誰にも知られぬ闇に満ちていく。

あまりの悔しさに、視界が歪むのがわかった。ジッパーがゆっくりと下ろされる。
その感情とは裏腹に、張り裂けそうな「欲望」がジッパーから漏れ出すように顔を覗かせて――

「あらあら……怜雄様ったら……」

「あっ……あ――――っ！」

妖魔が愉しげに瞳を細めた瞬間、妖斬りは絶叫していた。

妖斬り卯月怜雄は、兄の仇である妖魔カザネに挑み――敗北した。

二　〈鍛錬〉の章　〈妖斬り・来栖成哉〉

「……ぁっ……あぁぁっ！」

成哉は叫んでいた。

目の前に広がった「背徳」に、己の罪深さに――首を振りたくって。

『やめろぉっ……あぁっ、止めやがれぇ！』

『ふふ、辞めませんわ。ずっと夢見ていたんですもの……』

「……やったわね。大正解よ、地区長サマ？」

「ぁっ……はぁっ……あぁぁぁっ……！」

二人は対峙していた。

ただし――妖斬りと妖魔ではなく、敗者と勝者として。

怜雄の刀は遠くの床に突き刺さり、怜雄自身は、四肢を妖狐の尻尾に縛められていた。

ズボンは引き裂かれ下半身を露出。惨めなM字開脚に堕とされ、カザネの前に〈戦利品〉として固定されている。

「れ……お……」

一部始終を見ていた。応援を呼べる、呼ぶべき立場だったのに、しなかった。
俺はまた、裏切りを重ねた――
「はぁっ……ぁっ……」
「ふふ……」
妖斬りの顔からポロポロ何かが零れていくのを見て取ったアイラは、瞳を細める。
裏切りを遂げさせる事で、〈刀〉はより鋭く鍛えられる。
事を知り尽くした使い手に、妖斬りの地区長もまた〈鍛錬〉を受けていたのだ。
本人に、そうと気づかせず。

カザネは優雅さに満ちた表情で微笑んでから、ペニスに手を伸ばした。
『んぁっ……んっ……！』
怜雄の顔が歪む。
勃起しきった怜雄のペニスに艶やかな指が絡まり、上下に蠢き出す。
『ふふ、大丈夫ですか？　さきほどより、声が切なくなっていらっしゃるようですけど……』
『そ、そんなわけっ……』

『本当ですか？』

必死に首を振る怜雄の前、カザネがもう片方の手も伸ばしていく。

優しく亀頭を包み込むと、シュルシュルと泳ぐように蠢かした。

『ひっ……あっ……』

グチュグチュッ……ヌチヌチュッ……！

怜雄の声が響く。艶めかしい十指は陰のうをほぐす様に揉み、裏筋をきつく扱いてカリ首をめくる。

『わかりますか？　ここは妖斬り様が鍛えるべき真の〈刀〉です。ですが、私たち妖魔が導いて差し上げなければ鍛える事の出来ない〈刀〉でもありますわ』

『おっ、あ、はぁっ……！』

尻尾に縛められた両脚に力がみなぎる。

カザネは不自然なビクつきを見せる怜雄の前で唄いながら、優しく甘い指使いを施し続けていた。

『禁忌とはされていますが、効率良く高みに昇る事の出来る〈鍛錬〉です。何より妖斬館の鍛錬と違い、妖斬り様にも大きな悦びをもたらします』

『う、ぁっ……こん、かはぁっ……』

ペニスを引き下ろし、ヌコヌコと回すように扱き下ろす。亀頭を揉み、鈴口をひねってよじる。

首を振る怜雄を見ても、カザネは指も笑顔も止めることはなかった。

『はじめは否定していても、多くの妖斬り様が研鑽のため……私と契りを結ばれてきたのですよ？』

『んっ……っ！　おっ、おぁぁっ……！』

地区長室まで、ネバついた音が響き始めていた。

「ふふ、始まったわね」

「う、あぁぁ……」

（怜雄っ……カザネ様……）

成哉は微笑むアイラの前で、映像にくぎ付けになっていた。

怜雄のペニスを鍛錬するカザネの指使い。その一つ一つは成哉も施された物である。

亀頭をよじる指や血管を扱いてくる指使いに、ペニスが勝手に疼きだす。

『どうですか？　怜雄様？　その兆しはありませんか？』

『……誰が、お前なんかに媚びるかよ！』
『あら……』
怜雄は弾けるように叫んだ。
無様な磔に落ちても、決して目の光は鈍っていない。
『ふふ、そうですか……』
だが、カザネはそれに微笑むと、背後に控えさせていた尻尾を掲げた。
「まあ。やるみたいね」
「……れ、怜雄……」
ゾクリと成哉の背中が震える。
「はじめは否定していても、研鑽のためカザネと契りを結」んだ裏切り者として、この後の展開を予期してしまう。
『……はっ、俺がお前の言う事を聞くわけがねぇだろうが……！』
『それでしたら、まずはご自分の真価をしっかり認識していただかないとなりませんわ』
『お、俺のっ……？』
生え変わったばかりの滑らかな毛並みが、妖斬りの前で光る。

怜雄の身体を固定する三本以外の尻尾が、怜雄を取り囲む。
『な、何された所で……』
気丈にカザネを睨む怜雄の視線は、隠しきれずに揺れていた。艶やかな毛並みが威嚇するように剣士に近づいていく。絶世の美貌を誇る妖魔の笑みが、深くなる。
『今から、怜雄様を〈磨いて〉差し上げます』
カザネが嗜虐的に笑った。
その声と併せて、カザネの尻尾が這いまわり始めた。
『おいっ！　何しやが……ううっ！？』
刹那。怜雄の顔が崩れた。
ザワザワ、サワサワと箒で掃くように、怜雄の輪郭が尻尾になぞられていく。
まるで黄金色の畑に戯れる農民のようだった。
『これ、お前っ……あ、はあぁっ……』
途端に妖斬りの顔が緩みだし――歯を食いしばれなくなっていく。
『いいのですよ。身を預けて……私に任せてくださいな』
『はぁっ……くそぉっ……』

実った稲穂に背中を預けるような、良く乾いた草原に寝転ぶような、閨の闇とは全く違う、身を預けてしまいたくなる心地よさ――

『心地よくて、力が入りませんよね？　もうそろそろ、目を開くのも億劫でしょう？』

『ん、んなことっ……俺は、お前の術には……んあっ……』

『いいのです。何も考えずに身を預けてください。息を一杯吸って……』

顔が尻尾に包まれた、ゾクゾクと怜雄の身体が震える。

ああダメだ。力を抜いたら――！

『……ぁっ、あはぁ……』

だが、怜雄の四肢は徐々に力を抜いていった。背中、首、ありとあらゆる所が特上の心地で包まれて、有無を言わさず染みわたってくる。撫で上げてくる。

『それでいいのですよ、怜雄様……』

やがて、妖斬りの身体から完全に力が抜けた。致命的な敗北が、彼を追い詰めていたのかもしれない。

怜雄の忍耐力が弱いわけではない。ただ、強烈な苦痛と淫らすぎる快感に挟み撃ちされ続けていた剣士にとって、あれは想定外の「心地よさ」なのだ。

苦痛と快楽は堪える事が出来るが、心地よさは拒めない。
殺し合いには似つかわしくなさすぎて、準備が何も出来てないからだ。
母のようなぬくもりで揺さぶってくる。獲物が最も防御を固めていない所を責め上げる。
専門家として、妖斬りの弱点を的確に突く責めだった。
『ふふ、ここは怜雄様の「柄」にもなりますから……念入りに磨いて差し上げますね……』
『んぁっ……』
「あらあら。リラックスしちゃってるわねぇ、部下ちゃん」
怜雄は大開脚を強いられ、M字をV字に固められた。
力の抜けきった股間に、尻尾が集中していく。
『ふあぁ……くあぁぁ……』
『……ふふ』
怜雄からは見えない――そしてあの時の成哉も見えなかった――が、青髪妖狐の笑みからして、もともとそこが「本丸」だったのだ。
袋の筋一つに至るまで掃き清めようとするように尻尾に包まれ、尻の穴に至るまで磨かれていく。特にペニスには集中し、何度も何度もなぞられていた。

あんなに〈磨かれたら〉、怜雄だって――

自分の裏切りでこうなったくせに、成哉は他人事のように心配していた。

『さ、どうでしたか、怜雄様？　太陽の暖かさを思い出せましたか？』

『……ぁ……』

カザネが満足するまで磨かれたのち、怜雄は解放された。

傍目では何の変化もない。

ただリラックスした顔とは裏腹に、開かれた股間のペニスは狂おしいほどにいきり立っていた。

『これでご自分の真価がわかるようになりましたよ。今から実感させて差し上げますからね』

微笑んだカザネが、再び怜雄のペニスに手を伸ばす。

『んぁっ？』

『何も、考えなくてよいのですよ？』

その笑みは、どこまでも優しかった。

クチュッ、クチュクチュクチュクチュ……

『……あっ……あひぃーーーーっ！』

これまで聞いたことのない、怜雄の情けない喘ぎ声が響き渡った。

ペニスが、ズキズキと疼いた。

『ふふ、見違えるようでしょう？　これが怜雄様の持っていた本当の〈刀〉ですわ』

『な、何をっ！？　おっ、おぉぉっ……？！』

『言ったでしょう？　磨いて差し上げたんですよ。私たち妖魔でしかできないやり方で』

『おおっ、おぉぉっ！』

先ほどとは一変して、狂乱のままに首を振る怜雄。だがカザネは、無慈悲にもう片方の手も伸ばしていく。

優しく亀頭を包み込むと、シュルシュルと泳ぐように蠢かした。

先ほどと同じ光景が焼き直される。

『あひっ！……おおっ、おひぃっ！』

ただし、妖斬りの声もよがり狂う様も、三オクターブは異なっていた。

『……ここは妖斬り様が鍛えるべき真の〈刀〉です。ですが私たち妖魔が導いて差し上げな

ければ鍛える事の出来ない〈刀〉でもありますわ』

台詞も、笑みすらも同じだった。妖斬りの反応だけが、劇的な変貌を遂げていた。

妖狐の十指は妖斬りの袋をほぐす様に揉み、裏筋をコリコリときつく扱いて、カリ首をめくる。

『んあぁっ！　やめっ！　やめろぉっ……！』

怜雄は自分の股間を覗き込み、カザネの艶めかしい手管を見ながら必死に首を振った。

尻尾に縛められた両脚に力がみなぎる。涎が飛び散っていく。

『……禁忌とはされていますが、効率良く高みに昇る事の出来る鍛錬ですわ。何より妖斬館の鍛錬と違い、妖斬り様にも大きな〈悦び〉をもたらすものです』

『だからっ！　あぁ……おおっ！　おおぉっ――――！』

カザネは激しくガクつきを見せる怜雄の前で唄いながら、優しく甘い指使いを施し続けていた。

ペニスが引き下ろされ、ヌコヌコと回すように扱き下ろされる。亀頭が揉まれ、鈴口をひねってよじりまわされる。

『ふふ。はじめは否定していても、多くの妖斬り様が研鑽のため私と契りを結ばれてきたの

ですよ？』

　怜雄には、カザネを睨む余裕すら残っていなかった。

　そして首を振り乱す怜雄を見ても、妖魔は指も笑顔も止めずに責め上げる。

『そして私は、磨かせた頂いた妖斬り様には、それぞれにぴったりとした鍛錬をする事が出来るんですよ』

『なに、をっ……』

　先ほどとは異なった台詞に、怜雄が顔を歪めた。

「ふふ……もういいわ。見入り過ぎよ、地区長サマ」

「あっ……はぁ……はあぁぁ……」

　アイラの言葉で、成哉は映像が消えた事を悟った。

『例えばこ・れ。タマタマのココとチンチンをこうして……ふふ、行きますよ？』

『あ、ああやめっ……あっ、あ――――！』

　――ブチンッ

　嬌声を最後に、声も途切れた。

「……卯月怜雄クンの初〈鍛錬〉、順調のようね」
正面に回ってきたアイラが、呆けた表情の成哉の顎を引き、目線を合せる。
「この後が愉しみだと思わない？」
「あぁ……」
この後――きっと怜雄は、カザネ様の前に一本の〈刀〉となるだろう。カザネ様の手管の前に、そうさせられてしまうだろう。
そう。カザネ様もアイラ様も俺たちの不倶戴天の敵だが――上位者なのだ。
冠位持ちの巨乳妖狐が施す〈鍛錬〉は厳しく、翻弄されるしかなかった。
熟達した手並みの前によがり狂い、呆け切った悦びの声を上げ続けるしかなかった。
そして俺は、いつしか感嘆と共に受け入れてしまっていた。
何人もの妖斬りたちを堕落させてきた艶やかな専門家の前では、妖斬りの地区長である俺すらも、鍛錬の行き届いていない〈ナマクラ〉同然なのだと。
初めは無理やり教え込まれていた〈鍛錬〉を求め、股を開き続けたいと願っている自分が居る事を。
「それで地区長サマ？　当てたご褒美は、いらないのかしら？」

「……ほ、欲しいですっ……アイラ様ぁ……」
仲間を見捨てた今も、狂おしく勃起している俺のように。

＊

「それなら、わかっているわよね？」
羞恥に耐えながらもうなずいた成哉に、アイラはクスクス笑う。
まるで将軍を前にした兵士のように直立し、自然とアイラの目線を追った。
――閨の襖を跨ぎ、妖魔の鍛錬を欲した妖斬りの〈刀〉は、既に妖女たちの物である。
ペニスの所有権は、もう成哉から妖魔に渡されている。
無論、その妖斬りの主となった妖魔に最優先権があるが……〈妖斬り〉たるもの、いついかなる時も〈鍛錬〉を怠ってはならない。
相手が主の妖魔でなくとも、自らが鍛えを欲し受け入れられれば。そして有難くも妖魔が鍛えを下さるときは――何時いかなる時でもこれに応じ、自らを鍛え上げねばならないのだ。
そして成哉がご主人様ではないアイラに〈鍛錬〉していただくためには、儀式を行わなけ

ればならない。
二人の視線が、一つで交わる。
妖斬り地区長室の象徴、地区長が座る豪奢な机。ああ、儀式にはちょうど良い高さ――
成哉の脳裏に破ってしまう禁忌の数が積み上がったが、彼はそれを破り捨てた。

「……は、始めさせていただきます」
妖魔は無言で目を細め、それがすなわち合図だった。
アイラの見つめる前、成哉は一礼ののち、ベルトに手を懸けた。
ズボン、パンツを手際よく脱いでいき、半そでのシャツも脱ぎ捨てる。
あっという間に剥き身の刀身と化した彼は机に昇り、アイラと向き合う。
頭一つ分目線を下げ、自ら見下ろされる高さに陣取った。
「……っ！」
両の足指が百八十度になるまで割り開き、鍛えぬいた身体の全てをさらけ出した。
顔、腋、胸、腹、内股、そして股間。
成哉は今、身体の内を全てアイラの視線に晒していた。

歴年鍛錬を重ねた剣士の肉体は、その姿勢でも微動だにしない。
ただ一点――冗談のように、彼のペニスだけが狂おしくビクつき、カウパーを流していた。
「はぁっ……ぁぁっ……」
脚を割った所為で、そそり立つ妖斬りのペニスはまるで捧げ物のように妖魔の前に差し出されていた。
否――それは言葉の全き意味で、「捧げ物」だった。
「冠位〈赤〉。艶やかなる妖魔……アイラ様」
成哉の言葉に、アイラは口を開いた。
「――いかにも。何故私を呼ぶのかしら。妖斬り・来栖成哉」
いつもの笑みを消し、引き結んだ唇に厳かさすら含ませ囁いてくる。
成哉は、恍惚とした表情でかつて殺し合った宿敵を見つめていた。
震え続ける妖斬りと落ち着き払った妖魔の間に、しばしの沈黙。
「ぁっ……はぁ……」
成哉は脂汗を流して息を乱し、生唾を飲み込んでいた。次の言葉が出ない。
その彼我の差は、〈鍛錬〉を乞う側と施す側の差であり、主従の差であり――何より、経験

の差である。
妖斬りにとって、これは決してあり得てはならない背徳の儀式である。
自らのこれまでを全て否定する行いであり、これからを犠牲にささげる屈辱の誓いだ。
しかも、それを全て自らが乞い願う形で行わなければならない。
――だが、専門家からすればこれもまた練り上げた絵図面の一画である。
男たちの決してあり得てはならない瞬間は、より堕落させるためには欠かせない調教であり、それがゆえに何度も立ち会ってきている。
だからこういう時、禁忌の快楽を求める妖斬りたちに何が「クる」のか知悉していた。
「――――」
アイラは無言のまま白い脚を絡め、両手を美しい巨乳の下で組み合わせた。
肉付いてむっちりと伸びた脚と、魅惑的すぎるくびれと巨乳を見せつける。
瞳は細められ、冷たく、しかし柔らかさを湛えた視線で成哉を貫いた。
「ぁ……あぁ……」
我知らず、感嘆のため息を漏らしていた。
ああ、なんて艶やかで、いやらしい――

神々しさすら感じさせる巨乳妖魔の雰囲気に、妖斬りは飲み込まれていた。
ためらいが、消えていく。
「……っ……！」
妖斬りは腰をグッと前に出し、裏筋を見せて震えるペニスをさらに押し出す。
そしてご主人様に徹底的に教え込まれた口上を述べるべく、口を開いた。
「……ここに我、妖斬り・来栖成哉の真なる〈刀〉を捧げますっ……」
妖斬りの地区長は、鍛え上げた〈妖祓刀〉を副産物にした。
仲間を裏切り、精を捧げるペニスを真なる〈刀〉呼ばわりして仇敵に献上したのだ。
そして――
「――我が妖斬りの〈刀〉、〈鍛錬〉をお願いします！」
はち切れそうに勃起してギラついた〈刀〉は、ビクビク脈打っていた。
聞こえてはならない台詞が、言ってはならない男の口から、許されない場所で響いた。
（ああ、俺っ、俺ぇ……）
成哉は、仕込まれた通りの口上でおねだりを決めた。
屈辱と背徳が妖斬りを内側から焼き焦がしはじめる。

だがなお、彼は姿勢を崩すわけにはいかない。

「……ふふ」

艶やかな笑みを浮かべたアイラが、成哉の股間へと屈みこんだ。

ペニスに鼻がぶつかるぐらいに近づかれ、舐め回すように見つめられる。

成哉は乱れた呼吸のまま、鑑賞される彫刻作品のように四肢を固めた。

ここからは、妖魔の「品定め」の時間である。

鍛錬を乞う妖斬りの〈刀〉が、妖魔にとって相応しいかどうか裁定していただくのだ。

妖斬りにとってはまさにモノに成り下がる一刻であり、続けば続くほど自尊心が掘り崩されていく。

それもこれも、妖斬りを妖女たちにとって理想的な〈刀〉に堕すべく仕組まれた道だった。

「……」

（み、見られてるっ……アイラに、見られてるぅ……）

ことアイラは殺し合った宿敵である。その巨乳妖魔に己の〈刀〉の太さ長さ、血管の浮き出る様、カリの大きさ袋の有様を評価されている。

さらには――こちらが本職だが――超常の剣士として込めた力の量、そして妖魔による魔

改造が始まっている内部の状態。ありとあらゆるところを入念に裁定されているのだ。
妖艶に過ぎる視線を股間に浴びて、倒錯しきった現実に鼻の穴が膨らんで止まない。
成哉は刀を狂おしくギラつかせながら、臣下が如く裁きを待った。
「――素晴らしい〈刀〉ね。妖斬り・来栖成哉。さすが私に刀傷を付けただけあるわ」
「あ……ありがとうございますぅ……」
与えられたお褒めの言葉に、成哉は震えていた胸を屈辱でときめかした。
アイラにだらしない笑みを向け、自らの誇りを貶す言葉も気にしなかった。
アイラはクスリと笑うと、そそり立ったペニスを裏筋から包み込むように握りしめた。
――ぎゅうぅぅ
「んぁぁっ……」
「〈柄〉も固い芯があるみたい……ふふ、大分仕込んだのね。カザネったら」
舌を晒した成哉の前で呟いたアイラは、裏筋を撫でながら囁く。
「それで、地区長サマは……どこで〈鍛錬〉をしてほしいのかしら？」
「……は、はいっ」
アイラの言葉に、成哉は鼻息荒く一点を凝視する。

妖魔は隠そうともしないその視線に微笑み、そっと自らの肉体を抱いた。
「う、ぁ……」
成哉の視線が、釘付けになった。
乳肉に押し上げられ、際どい和服が悲鳴を上げる。艶めかしい乳肉がむっちりとたわむ。
そのままユサユサと揺さぶって、匂い立つ色香を振りまいてきた。
「……お、おっぱい！　アイラ様のおっぱいで鍛えていただきたいですっ！」
我慢しきれないという顔で、妖斬りは叫んでいた。
ペニスを尻尾みたいに振り、媚を売りながらおねだりを決める。
「あら……またおっぱいなの？　カザネにさんざん〈鍛錬〉してもらっていたじゃない」
「でもっ……ですがっ……」
「なあに？」
横目で妖斬りの顔を見やり、成哉の変化を愉しんでいるのは明白だった。
それがわかっていてなお、成哉は相貌を崩すのを我慢出来なかった。
息荒く、妖魔の巨乳の谷間を見ながら叫んだ。
「俺は……そのために怜雄をっ……部下を売りましたっ！」

信頼のおける仲間より、妖魔の美巨乳による〈鍛錬〉の方が大事――そう言い切った地区長に、アイラは満足げに顔を歪めた。

「あ、アイラ様っ……願わくば、本日は我が〈刀〉、アイラ様のおっぱいで〈鍛錬〉いただきたいですっ！」

成哉は、堕落を重ねた。回を数えるごとに、深く、早く。

「……ふふ、鍛錬熱心な妖斬りサマは好きよ」

舌なめずりしたアイラは、そっと床に膝立ちになる。

「もっと強く、高みに昇れるように……今日はアタシが鍛えてあげるわ。妖斬り・来栖成哉」

むっちりと谷間を寄せ上げ、微笑んだ。

「あ、ありがとうございます。アイラ様……」

成哉は端正な顔を崩して何度も生唾を飲むと、机から降り立ち、両手を頭で組んで仁王立ちになった。

信頼してくれた兄弟たちの顔がよぎったが――

（すまない怜雄、弘……俺はもう、逆らえないっ……）

それは一瞬で、どこかに消えてしまった。

「いらっしゃい。自分で突き入れなさい」
その指示に何度も頷くと、成哉は深すぎる谷間めがけて腰を突き出した。
――ズニュゥ
「おっ……あぁ……」
瞬間、成哉は舌を零していた。
ズニュリと音を立て、妖斬りのペニスが妖魔のおっぱいの谷間に飲み込まれていく。
まるで底なし沼に沈むように、根本まで埋まっていく。
成哉はペニスを根本まで差し込んだが、なお妖魔の乳房には奥があった。
鍛えた妖斬りの両脚は緊張をみなぎらせてガクガクとビクつき、妖魔の巨乳と情けなさすぎるコントラストを描く。
「まあ……もう、とってもビクビクしてる」
窮屈だった谷間が怒張したペニスに無理矢理割り開かれ、柔らかな乳肉が抗議するように成哉のペニスをつぶしてくる。

妖魔に血液の鼓動はないが、温かくてムチムチの張りが逃げ場なくみっちりと包み込んできていた。根本だって、カリの裏だって関係ない。

「ひ……ぁっ……」

彼は汗を飛ばしたまま、涎を垂らして禁断の快感を味わう。

――ああ、待ち焦がれたおっぱいに俺のペニスが埋まっている。早く、もっと味わい尽くしたい――

半ば自動的に、腰を前後に動かそうとした。

「ちょっと待ちなさい？」

「は、はぃっ……？」

だが、アイラの声が成哉の腰を止めた。

アイラは、舌なめずりしながら囁いた。

「怜雄とカザネの因縁……教えてくれるかしら？」

「――そ、それはっ……」

その言葉に、カチカチと歯を震わせた。

妖斬隊の中でも秘密となっている、怜雄の過去。いや、十三地区の暗部――

「どうせならきちんと知っていた方がアタシも愉しいのよ……だめかしら？」
だが、アイラがそっとおっぱいをゆすってくると、成哉は腰をわななかせた。
「ひぁっ……！」
パツンパツンにはった乳肉が苦しそうに揺れ、中のペニスがひしゃげられる。
暴力的な快楽に、頭の中の懸念が蕩けて像を結ばない。
「そうね。一つ喋る事に一度動いていいわよ」
「ぁっ……んぁぁっ……！」
アイラが舌なめずりしながら、そっと揺すってくる。
（こ、これじゃあっ……）
気持ち良いのに、これでは達せない。この美巨乳を味わい尽くしたい。
腰を思う存分うねらせて、挟み潰していただきたいのに――！
「さ……地区長サマ？」
時間にして、十秒程の沈黙だったろうか。
「……災厄の……夜の事です」
成哉のわななく唇に、アイラは愉しげに微笑む。

快楽に負けた地区長は、部下の秘密を売り渡しはじめた。
「そうよね。その夜だとは思っていたわ……いいわよ、一度動いて？」
許可のすぐあと、成哉は腰を引いた。
――ズニュッ……ムニュウゥ……
妖魔のムチムチの乳肉が名残惜し気に竿を押しとどめ、四方八方から粘り気を伴ってズリ立ててくる。カリ首がその形に乳房をたわませ、めくられそうになる。
再び肉槍を突き立てれば、亀頭が悲鳴を上げながら割り開いていく。脚の付け根まで、陰のうまでおっぱいに当たってしまう。
「おぉっ……おぉ……」
（はぁぁ……これぇ……）
地区長の表情が、だらしなく蕩けた。
たまらなかった。一度でも妖魔の巨乳でペニスを動かしてしまったら、脳がだめになる。とめどなく味わってしまいたくなる。頭が埋め尽くされる。
「災厄の夜――何があったのかしら？」
「あ、あの時……十三地区内で兄の理仁さんと怜雄がカザネ様と邂逅したのですっ……怜雄

は兄と共にいて……理仁さんの犠牲で助かったのです。くはぁ……」

「へぇ……ふふ。その調子よ。味わうみたいにね……さ、続けなさい？」

アイラの見下ろす前、妖斬りの腰はビクつきながら深い谷間を行き来し、つまりその分部下の誇りを売り飛ばしていく。

「俺も、怜雄からの危急の知らせを受け……はぁ……応援に駆け付けました。しかしそこには既に誰もおらず……くうぅっ……」

ヌププ、ズニュッ……ヌプッ、ズニュッ……

「カザネったら。情報をくれた〈刀〉はずいぶん良い子だと喜んでいたけれど……それがあの子のお兄ちゃんだったのね。面白いじゃない」

「その後すぐに、十三地区が襲撃に会い、激戦と……おぉっ……」

……ズニュッ、ムニュッ、グニュッ、ニュウゥ……

「は、はい……申し訳ございません……おぉ……」
「仕方ないわ。それが使命ですもの……でも。ということは……あの部下クン、考えていない事があるのね？」
アイラはクスリと笑い、当たり前の調子で尋ねてくる。もう成哉がためらないと踏んでいるのだ。
「っ……」
たかを括っているのではない。それは妖斬りの〈鍛錬〉に手慣れた専門家の証だ。
（ああ……悔しい……悔しいぃ……）
「しかしっ、はぁ……は、はいっ……怜雄が、無意識のうちに考えていない事が……くぅぅ」
それが悔しいのに、口も腰も止まらない。むしろどんどん早くなる。
妖魔の自信を、仕留められた獲物の立場から証明してしまう。
妖魔アイラにかかれば地区長ですらこうなると、示してしまう。
アイラのむっちりとしたおっぱいから抜け出したいと、どうしても思えない。
「……地区の妖斬りの中に……妖魔に内通していた者が居たという事ですっ……」
アイラの乳房のハリと柔らかさを堪能するように、腰を波打たせながら言った。

そう、裏切り者が居なければ地区はバレない。
そしてあのタイミング。第十三地区を売った〈裏切り者〉は恐らく――
「あら。それは今の地区長サマみたいな？」
「っ？！」
「〈妖魔に敗れ、その偽りの美貌と肢体に人の世を売り渡す行い〉……だったかしら？」
「あ、あぁ……」
アイラが暗誦したのは、妖斬隊の禁忌のうちの最大の一つだった。
成哉は視界を涙で一杯にして腰を止めたが、アイラがゆっくりとおっぱいを動かし、フォローを入れてきた。
ムニュッ……ズニュッ……
「あ、ぉっ……！」
「ほぉら、答えて？　地区長サマ？」
快楽が迸る。顔を下ろせば、優美さすら感じる妖魔の大きなおっぱいが、ビクつく妖斬りのペニスを挟みつぶし、ゆっくりと研ぎ上げている様を見せつけられる。
（ああ……俺のチンポ、おっぱいで研ぎあげられてるぅ……）

成哉はかつての〈裏切り者〉なぜ堕落を選んだのか、痛烈に理解出来てしまった。
してはいけない事だと頭ではわかっているのに、囁かれると何も考えられなくなってしまう。
妖魔からの快楽は中毒で例えられた。
敗北する前は、何をバカなと思っていた。
強靭な意志さえあれば逆らう事が出来ると――

ズニュッ……ムニュゥッ……ズニュッ……ムチュウゥッ……

「くひぃっ……そ、そうですっ……俺のように、妖魔に敗れ、その快楽調教に屈した裏切り者がっ……あっ、あひぃっ……！」
でも、それは違った。
バカは俺の方だったのだ。
きっと今の俺のように、妖魔の甘やかな手管でその〈刀〉を鍛錬されていたのだろう。
頼りがいのある真面目な妖斬りだった理仁さんもきっと、カザネ様のおっぱいで股間を尋

問されて――

背筋を罪悪感と屈辱に凌辱されながら、成哉は頷いていた。

「ふふ、意地悪しちゃったわね？　ごめんなさい。続けて？」

「あぁ……はい。怜雄はまだ子供で、逃げる事しかできませんでした……だからあいつはその事をずっと……」

明かされた事実に、妖魔も意外の表情で口を開いた。

「まあ。それは妖斬隊では許されるの？」

「……勝てぬ戦はするなと教えられており……っ、怜雄のそれが責められる事はありませんっ……」

「そうなの……でも、そうよね。勝てぬ戦はしちゃいけない、ふふ、その通りね？　どんな結末が待っているかわからないもの。ね、地区長サマ？」

「あぁ、あぁっ……は、はいっ……！」

意地悪い笑みに見つめられ、背筋まで震えた。

妖魔の快楽は中毒。勝てぬ戦はしてはいけない――

口酸っぱく教えられていた教訓を全身で体現する地区長は、切なく頷いた。

バットエンドを迎えた〈主人公〉は、もう戻れないんだ。
「それから怜雄は己を鍛え上げ、歴戦の戦士となりましたが……今回、カザネ様と相まみえてしまい……っ？」
「ふふ、ありがとう。十分よ」
「あぁ……あひぃっ？」
「〈妖斬り・来栖成哉〉。汝の鍛錬の時間よ。しっかりと腰を振りなさい」
主の命は、成哉の顔を溶かした。
「は、はいっ……ありがとうございます、アイラ様ぁ……」
成哉は頭で組んだ手をギュッと強め、震える両脚にムチ打ち、力強く腰を振り始めた。

ズニュッ、ムニュッ、ズニュッ、ムニュッ……！

「くっ……かはぁっ……い、いひぃっ……！」
妖斬りの股間と妖魔の巨乳が、激しい肉の音を響かせる。
巨乳は成哉の狂いかけた腰を受け止めるように艶めかしくたわみ、今にも張り裂けそうな

程勃起した剣士の〈刀〉が、何度も谷間に飲み込まれていく。
むっちりと乳肉にズリ上げられ、亀頭が乳肉に削ぎ落される快感に星が飛ぶ。
「止まりなさい」
「はっ……はっ……」
ため息交じりの声に、腰を止めた。
「まだまだなってないわね……」
今度はアイラにおっぱいをこね回され、ペニスを前後に揺さぶられた。
「こうよっ……地区長サマ？」
グチュッ！　グチュッ、ヌプッ、ヌチュゥッ……！
「おぉっ……！　お、オおっ――！」
その指導に、成哉の身体その物がガクついていく。手を使って谷間をさらに締められ、玉の汗が散る。
絞り出されてしまいそうな動きに、涎までも飛び散った。
「あ、アイラ様っ！　出っ……！」
「ダメよ。堪えなさい。妖斬りの力をしっかりと精に溶かし込みなさい」

「っ……っ……ぁっ……！」

厳しい声に、股間をガクつかせながら歯を食いしばるしかなかった。

「ふふ……練り上げてあげる」

その声と共に、今度は円を描くようにおっぱいがこねられる。両の乳房が逆に引っ張り、ペニスが肉質たっぷりにズラれ、溺れていく。

「おおぉっ……おっ、おひぃ～～～！」

むにゅむにゅとおっぱいをこね回す妖魔の前、情けなさすぎる嬌声が地区長室に響く。

「良い声よ……ふふ……」

妖斬りの地区長は、巨乳妖魔の手管に舌先まで震わせて堪えるしかなかった。

それは屈辱を避けるためでなく、更なる快楽を受けるため。更なる恥辱を重ねるために。

たっぷりと錬り上げられた後、再びの腰振りを命じられた。

――ズニュッ、ムニュッ、ズニュッ、ムニュッ、ズニュッ……！

「あはぁ……あぁ……アイラ様っ……アイラ様ぁっ……！」

「いいわよ。ふふ、さっきより様になってるわ……」

欲望のままの腰使いに、アイラがニヤニヤと笑った。

その激しいストロークは、アイラの心臓にペニスを突き立てたいと言わんばかりだった。
それは端から見れば惨めな堕落そのものだが、仇敵の教導を受ける妖斬りにとっては筆舌に尽くせぬ厳しい〈鍛錬〉だ。
（ああっ、すごいっ、すごいっ……！　た、たまらないぃぃっ……♡！）
妖斬りの地区長は歯を食いしばり、両手を爪立てながら腰を振る。
妖斬館での鍛錬では決して味わえぬ狂おしさ。仇敵にして艶めかしすぎる教官からの厳しい指導。こちらの弱点を知悉した上位者の手管。
その全てに打ちのめされながら一心不乱に腰を振り、アイラの乳房をたわませる。
敏感になりきったペニスを、何度も何度も狂おしいズリ上げに放り込む。股間と谷間を密着させ、抉るように円を描く。
「はぁっ……あぁっ……はぁっ……おぉぉっ……！」
妖魔の〈鍛錬〉を受ける妖斬りの全身が汗ばんでいく。打擲音はカウパーと汗に彩られ粘っこく、激しくなっていく。
自分が造り替えられていくのがわかる。巨乳妖魔の望むままに堕落を辿っていくのが。
「……ふふ」

ますます熱を帯びていく成哉を、アイラは艶やかな笑みで見上げていた。
「アイラ様っ、アイラ様ぁ！　もう、もうっ……！」
やがて妖斬りの地区長は、全身をぐしょ濡れにしながらトドメを乞うた。
「まだここが限界ね……いいわよ。〈鍛錬〉の成果を見せなさい。なんて言うかは、わかってるわよね？」
促されたのは〈集中鍛錬〉の最初、教え込まれた口上――決して口にせぬと決意しながら、結局口にしてしまった――だった。
「あ、ありがとうございますっ……ああっ、妖魔アイラ様っ……！　妖斬り、来栖成哉っ！　アイラ様の谷間で……おっぱいでイカせていただきますぅっ！」
成哉は狂おしいまでに腰を突き込んだ。
アイラに受け止められたペニスが、おっぱいにこねまわされ、谷間の中で爆ぜた。
「い、イグッ……あああっ！　イッ……イグウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！」
妖斬りは全身を打ち震わせて、嬌声を上げた。

迸る音まで響きそうな勢いで、妖魔の谷間の中にその精を注ぎ込んでいく。
「ふふ、悪くないわねっ……さすが地区長サマ、膨大な力が流れ込んでくるっ……♡」
アイラは微かに頬を紅潮させながら、注がれていく精で汚れる肉体を満足げに見る。
（ああっ、俺が、俺がぁっ……！）
自分の中から「自分」をごっそり引き抜かれるような感覚。
変わりに目も眩むほどの快感が脳まで響き渡り、虚になった部分を即座に埋めていく。
深い谷間に磔にされてしまった成哉は、妖魔が少し腰を揺するだけで悲鳴を上げた。
地区長の精を搾り取るアイラの全身が、微かに光を帯びていく。
「ああっ……素敵な精よっ……♪」
成哉は今、糧になっているのだ。抜けていった自分が艶やかな妖魔の一部となり、力となっている。
（俺が……アイラ様の中にっ……敵の、力にぃっ……）
だが、その事を意識した妖斬りのペニスの芯は、ズキズキと疼いていた。
「あらまあ……いいわよ、もっと、もっと頂戴……妖斬りサマ……♡」
「ひぁっ……あ、ああっ！　ああっ！」

それを見抜かれたのか、濡れた微笑みを浮かべたアイラにおっぱいを前後にゆすられる。
成哉はガニ股の股間を強く突き出し、よりドロリとした精を吐き出していく。
ペニスはおっぱいの中で見えないが、その度に狂おしく首を振っていた。
「おおっ！　おっ……おおおっ～～～～！」
決して発されてはならない地区長の快楽の嬌声は、絶対聞こえてはいけない場所で響き続けた。

＊

「あ、あぁ……」
やがて精が止まると、アイラはそっと妖斬りのペニスを解放した。
赤く腫れあがり打ち震える地区長のペニス。コンデンスミルクのような精で濡れた淫魔の谷間。〈鍛錬〉の激しさを思わせるそれらの間に、ねっとりとした白濁の橋がかかっていた。
成哉はガニ股のまま姿勢をキープし、そのいやらしい様を見つめて生唾を飲む。
「地区長サマ。私の〈鍛錬〉、どうだったかしら？」

妖魔は震えるペニスについた精をおっぱいで拭きながら、上目遣いに囁く。
「さ、最高れすぅ……た、〈鍛錬〉、ありがとう、ございましたぁ……♡」
成哉は何度も頷いてから、がっくりと膝をついた。
「んはぁっ……くはぁ……はぁっー、あはぁっ……」
息も荒く、〈鍛錬〉を終えた自分のペニスを惨めさと共に見下ろす。
苦しさすら伴って赤く腫れあがる己のペニスを見るのにも、すっかり慣れてしまった。
忘我の境地で、痛感していた。
誇りと戦う理由と才能を併せ持った男が妖斬りになる。
でも、それは決して望む結末を手繰り寄せる条件にはならない。
自分が主人公だと思っていることは、主人公だと証明することにならないんだ――
「……地区長サマも素敵な顔になってきたわね……ふふふ♪」
もはや成哉がアタシたちを裏切る事はあり得ない。
そう断じたアイラは、仇敵との〈鍛錬〉を終えた妖斬りをそっと抱きしめた。
「あ、あぁ……♡」
「よく頑張ったわよ。褒めてあげるわ」

歓喜の声を上げる彼の頭をそっと撫で、堕落への褒美を重ねる。

「あら」

その時、アイラの袂が震えた。

アイラが手繰ると、現れたのは黄金色の房――妖狐の尻尾の一部である。

『……あ、アイラ様が〈刀〉……〈妖斬り・甲斐弘〉にございます……』

響いてきた声は、潜んでいるようで、どこか上擦っていた。

「待っていたわよ、主人公クン――いいえ、我が〈刀〉……♪」

裏切りはもう止まることはない。どこかで誰かが――理性の守り手たちが希望への依存を始めた中、艶やかな魔性たちの手は着実に忍び寄ってきていた。